

III 參考資料

1 宿泊場所「アトマ (ATOMA)」の生活、「中華琥珀」での昼食

1. ユースゲストハウス ATOMA での生活

8月21日(水)～8月23日(金)

福島県福島市桜本字船石 15-2

(1) ユースゲストハウス ATOMA について

福島駅から車で約 20 分もすると、吾妻山の麓、自然に囲まれた場所にあるユースゲストハウスアトマに到着する。朝は日の出を、夜は夜景とともに星や月を一望することができる。また、大きな望遠鏡があり、夜には月や星の観察をすることができる。食事は、福島の野菜や果物、川魚、鶏肉などが使われており、福島の良いところを存分に味わうことができる

宿泊施設となっている。さらに、国産ヒノキと青森ヒバの「バリアフリー浴槽」で木のいい香りに包まれて一日の疲れを癒すことができる。

また、家族や年配の方が快適に利用できるように設備の充実がはかられた、新しいタイプのユースホテルである。



(2) ユースホテルとは

ユースホテルはドイツで生まれ、その歴史は 100 年以上である。約 80 の国と地域に 4000 か所以上の宿泊施設があり、日本には北海道から沖縄まで約 220 か所のユースホテルがある。

日本では、古民家を再利用、お寺や神社、学校の校舎を改造したというような小規模で家庭的なユースホテルから、研修所や体育施設が充実した大規模ユースホテル、海外からの旅行者の多い国際交流のできるような都市型ユースホテルまで、様々な形がある。さらに、ユースホテルの中には、「つながり」や「交流」を大切にしながらも、プライベートの空間も重視したユースゲストハウスもある。

(3) 2 日間の宿泊の様子

私たちは、8月21日から23日の2日間をユースゲストハウスアトマで過ごした。桐山教授と学部生 5 人、大学院生 4 人の計 10 名でアトマに宿泊した。

宿泊 1 日目は、福島医大、公明党議員と語り合う会等充実した内容と共に八王子から 4 時間半の長旅での疲れを、福島の食材を使ったおいしいごはんとお木のいい香りのするお風呂でその疲れを癒すことができた。

宿泊 2 日目は、夜の食事を終えた後に大きな望遠鏡で月と星の観察をした。1 日目は曇っていて見えなかった月や星が、2 日目にははっきりと観察することができた。また、月・星の観察後には、学部生・大学院生で福島の現状について語り合うなどロマン溢れる対話があった。

私たち以外にも、吾妻山の地質学を研究している大学生の方やツーリングで来られている壮年の方などが宿泊されており、交流する機会を得ることができた。まさに、ユースホテルの醍醐味である「交流」、「つながり」を持つことができ、満足した 2 日間のアトマでの宿泊生活となった。



2 日目の夜ご飯
福島でとれた川魚と野菜

2. ラーメン店「琥珀」

平成23年8月22日（木）
松川第一仮設住宅集会所

(1) ラーメン店「琥珀」について

ラーメン「琥珀」は、福島県飯舘村の人気ラーメン店の一つである。定番の味噌ラーメンや、醤油味の飯舘ラーメン、豚ロースの「琥珀ラーメン」などメニューも豊富にそろっている。一番人気は、店の名前がついている「琥珀ラーメン」で、片栗粉ベースの衣をつけてカリッカリに焼いた豚ロースとシャキシャキの野菜炒めをトッピングしたしょうゆベースのラーメンです。このメニューは、34年前の開店以来の看板メニューです。2011年の東日本大震災による福島原発の事故により、飯舘村の人は避難を余儀なくされた。福島県松川工業団地の松川第一仮設住宅で飯舘村から避難してきた方々が生活をしている。ラーメン「琥珀」も松川第一仮設住宅の一角で営業を再開した。



一番人気「琥珀ラーメン」

(2) ラーメン店「琥珀」での昼食

飯舘村村長のお話、飯舘村から避難をされている方々との交流会を終えた後、私たちは松川第一仮設所内にあるラーメン店「琥珀」で昼食をいただいた。

避難生活をされている方のお話は、私たちにとって胸迫る内容であった。ラーメンを食べながら、「私たちにはできることはなんだろう」と語り合う一幕もあった。真剣な話もしながらも、看板メニューの「琥珀」ラーメンや飯舘ラーメンをおいしくいただいた。



上写真：ラーメン店「琥珀」外の様子
下写真：店内の様子

3. 感想

ユースゲストハウスアトマでの2日間の宿泊で、桐山ゼミ生同士のつながりを深めることができた。私たちはこれから、実際に福島を訪れ、現地で見聞したことを、身近な人や社会の人々に発信していく。今回参加した、桐山ゼミ生同士が福島の現状を語り合う時間をアトマで過ごせたことが私たちにとって最大の収穫であったと私は思う。ラーメンは、ボリュームたっぷりだがさっぱりした味でおいしく、琥珀ラーメンが人気の理由が分かった。また、店内を見回すと、飯舘村から松川第一仮設所での営業再開を取り上げられている新聞などが貼られていた。飯舘村の人だけでなく福島の方々が、ラーメン店「琥珀」の味を再び体験することを心待ちにしていた様子が分かった。店主自らも避難者でありながら、避難所の方々に笑顔でラーメンを提供する姿に感動した。これからも、ラーメン店「琥珀」が大繁盛、大発展することを心から応援していきたい。



2 聖教新聞掲載記事

2013年9月11日(水)付け聖教新聞の「きょうを歩む」欄に、本研修の記事を載せていただきました。

研修に同行していただいた記者の方は、編集局報道第1部副部長の河野一弘さん、編集局報道第2部の石田幸司さんです。研修の全行程に同行された石田さんには、紙面に限りある中、取材された全内容からむつかしい精選をして記事を執筆していただきました。また、お二人には学生たちのよき先輩としても、参加した学生たちに気さくに接していただき、いろいろと教えていただきました。本当にありがとうございました。

2013年(平成25年)9月11日(水曜日) 5版 (2)

創価大学生が福島で研修会

「故郷の復興に役立ちたい」

この夏、創価大学教職大学院(東京・八王子市)の桐山信一教授のゼミに学ぶ教育学部生および教職大学院生が、福島市でゼミ合宿を行った。

きょうを歩む

東京にいと、あの震災があったという実感が薄れていく。将来、教師となる

自分たちは、子どもたちに震災をどう伝えていくのか。福島第一原発事故後の福島の現状を肌で感じたいと市内を回った。

市内にある松川仮設第1住宅。ここには、全村避難が続く飯館村の人々が暮らす。集会所に住民が集まり、菅野典雄村長の話(別掲)を聞いた後、学生と住民との懇談会が開かれた。

「みんなで頑張って『日本一美しい村』をつくってきたいんだよ。いよいよこれからという時に原発事故

が起った。何も悪いことしていないのに」

「農家だから、自給自足の生活から、一から十まで買って食べる生活。米も買わなきゃいけない」

「ここにきて一番困るのは仕事がないこと。やることがないんだ。村にいれば細仕事があった」

「私たちは、立ち上がりたくても立ち上がれない。除染も進まないし、農家だから、将来、村に戻れどしても、どうやって喜らしていけばいいのか。ぐっす

り寝たことはないね。事故は収束していないし、影響は広がるばかりだから」

「村に戻れるようになって、年寄りも帰って、若い人は帰れないと思う。若い人が戻ってこない限り村は成り立たない」

胸の内を吐き出す住民。真剣に聴き入る学生。

「皆さんが若い世代に伝えたいことはありますか」

一人の学生が質問すると、すぐに声が上がった。「受け継いで欲しいことよりも、自分がこの後、どうなるのか、それが一番の悩みなの。希望も何もないんだもん……」

学生たちは息をのんだ。込み上げてくるものをグッとこらえた。教育学部3年の梅津累(つむぎ)さんは、福島市出身。「今は希望も何も無い。これが当事者の思いなんだと分かりました。自分ができることは何かと考えるせせせせしました」

大震災発生から2年6ヵ月

「逆境」を「好機」に

合宿ではほかに、放射線と甲状腺がんの関係、除染作業の実態、放射線教育、事故後の小学校の対応等について話を聞いた。

最終日は、同市土湯温泉町にあるバイナリー発電施設を訪問した。

原発事故後、風評被害で観光客の大幅な減少に悩む同町は、温泉の熱や河川の流れて発電する自然エネルギー



創大生が、飯館村から避難した方々に「今」の思いを聞く(8月22日、福島市の松川仮設第1住宅で)

ギーによる街づくりを目指している。

計画を進める「土湯温泉町復興再生協議会」の会長

である加藤勝一さんから概要の説明を受けた。

原発に依存しない自然エネルギー——復興への思い

「私の故郷、福島に役立ちたい」

卒業後は、福島に戻ろう——もともと考えていたことだったが、より固い決意に変わった気がする。

「現実を前に、自分はどう生きていくべきか——日々、問い掛けながら行動していきたいです」

梅津さんのまなざしは、力強く前を向いていた。

3 第12回創大教育学会（2014/1/30）発表要旨

福島市の放射線教育の実際—福島研修における学びの報告—

○西敏明 北村創 吉見真美 竹井恵子 石川原恵子 山口大志 梅津累 佐藤絢輝 高山佳樹
 （創価大学教職大学院教職研究科・教育学部）

I 研究の経緯

東日本大震災により引き起こされた福島第一原発事故から2年以上が経過した。事故発生直後の国民の混乱の激しさは言うまでもなく、とりわけ放射能が及ぼす人体への影響について、氾濫する情報に多くの人々が翻弄され、国民一人ひとりが放射能について考える大きなきっかけとなった。しかし、現在では放射能に関連する報道を目にすることも事故直後と比較すると少なくなり、被災地が復興に歩みを進めようとするなかで、放射能に対する国民の関心や問題意識は、多少薄くなってきているように思われる。原発事故による放射能汚染は、今後長年にわたって、私たちの生活を脅かし続けることになる。私たちは、福島市の現地視察を通して、学校や行政の取り組みについて調査し、今後、教師としてどのようにして福島の現状を伝えるべきか、また、放射線教育をどのようにしていくべきかを検討した。

II 研修の概要

研修は平成25年8月21日～23日に実施した。研修での主な訪問先と内容は以下の通りである。

- ①福島県立医科大学（放射線と甲状腺がんの因果関係、県民健康管理調査の概要と検査結果の説明等）
- ②松川第一仮設住宅（飯館村長からの講話、避難住民との交流と今の生活や帰村についての聞き取り）
- ③福島市役所、公会堂（除染の現状と福島市教育委員会による放射線教育への取り組みの説明、除染現場の視察）
- ④福島市立三河台小学校（原発事故が児童の心情や学校教育に与えた影響と実態、学校現場における取り組み）
- ⑤土湯温泉バイナリー地熱発電施設（再生可能エネルギー導入のモデル事業の説明と発電施設の視察）

III 福島市の放射線教育

福島市教育委員会では防災教育の充実の施策として、独自で「放射線教育指導資料」を作成し「放射線に対する正しい知識と理解のもとに適切に判断し、行動できる力を子どもたち一人ひとりにはぐくむこと」「福島復興に向けて共に前向きに生きていくことができるようにすること」をめざした取り組みを行っている。指導資料には、具体的な防災マニュアルのモデルや義務教育段階の放射線教育指導事例（指導案）が小学1年生から中学校3年生まで全ての学年で提示されており、24年度の2学期から各学校において活用されている。この指導事例は、文科省が発行した副読本と福島県が発行した副読本の内容を踏まえながら、福島市の児童生徒の現状と課題に沿った内容で、福島市教育委員会が独自に作成したものである。また、放射線教育の学習指導要領における位置づけは、小学校では「安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導」の一貫として、体育科・家庭科・特別活動で「それぞれの特質に応じて適切に行う」としている。また、中学校では、特別活動や理科に位置付けられて実践が行われていることがわかった。

IV 今後の展望

放射線教育の実際と課題を踏まえて、それらを解決していくため、より具体的な実践や指導法について検討することが求められる。また、放射線や原発に関連する事柄のみならず、子どもたちが生活と科学、環境等との深い関わりにおいて今後現れる問題とどのように向き合うか、自らの考えをもち、行動することができるようにする資質・能力をさらに育成していくことが不可欠である。その実現に必要な、教員や教員を志望する学生の意識や指導力の向上をいかに図るかも、重要な検討課題である。

参考資料：放射線教育指導資料 福島市教育委員会（平成24年8月）

キーワード：放射線教育、放射性物質、除染、甲状腺がん、福島市、再生可能エネルギー

4 現地での空間線量率測定値

研修期間中に空間線量率を測定した。車中は移動中の自動車の中での測定、1mは地上から約1mの位置での測定、地上は地面の上に測定器を置いて測っている。測定機種では、MODEL923とRADEXはGM管、PA1000はシンチレーションである。測定値では、福島医大の管理棟前が約 $0.7\mu\text{Sv/h}$ と高く、地上ではその2倍になった(No11、12)。宿泊したユースホテル「ATOMA」は八王子の2~3倍程度であり、予想よりも低かった(No13~15)。福島市公会堂の敷地内で除染作業が行われ、掘り起こした土の上に黒いビニールシートがかけられていた。作業の方がアロカの表面測定器でβ線を測定していて、数値は約 $1\mu\text{Sv/h}$ であった。持参したPA1000をアロカの横に置いてみると何と $6.13\mu\text{Sv/h}$ を示した(No22)。PA1000はγ線だけを感知するから、放射能の合計はβ線とγ線の合算で約 $7\mu\text{Sv/h}$ となる。この位置では年間 60mSv の外部被曝を受ける値である。訪問した三河台小学校裏の通学路では、校舎側が $0.13\mu\text{Sv/h}$ 、家が立っていたり草地になっていたりする反対側では $0.63\mu\text{Sv/h}$ であり、校舎側と大きく違っていた(No25、26)。反対側はもっと高くなる場所もあった。校舎側は除染されているが、反対側はまだ除染が行われていないためであると考えられる。このような事実を知れば、児童には校舎側を歩きなさいと言わなければならないだろう。このようにところにも、放射能汚染の深刻な実態が垣間見られた。

No	測定位置 1mまたは地上	測定場所・生活環境	測定日・時刻	測定値 [$\mu\text{Sv/h}$]	測定器種
1	車中	久喜IC	21/10/57	0.022	MODEL923
2	車中	渡良瀬川(高速)	21/11/150	0.046	MODEL923
3	車中	白河(高速)	21/12/38	0.200	MODEL923
4	車中	須賀川(高速)	21/12/51	0.066	MODEL923
5	車中	上河内IC	21	0.073	MODEL923
6	車中	上河内IC	21	0.080	RADEX
7	車中	郡山市	21	0.170	MODEL923
8	車中	郡山市	21	0.130	MODEL923
9	車中	郡山市	21	0.160	RADEX
10	車中	県立医大入口	21/13/32	0.240	PA1000
11	1m	県立医大管理棟前モニタリングポスト周辺	21	0.697	PA1000
12	地上	県立医大管理棟前モニタリングポスト周辺	21	1.381	PA1000
13	地上	ユースホテル「ATOMA」	22	0.201	PA1000
14	1m	ユースホテル「ATOMA」	22	0.152	PA1000
15	地上	ユースホテル「ATOMA」	22	0.150	MODEL923
16	1m	仮設住宅	22	0.170	PA1000
17	地上	仮設住宅	22	0.167	PA1000
18	1m	琥珀	22	0.154	PA1000
19	1m	福島市役所	22	0.145	PA1000
20	エレベーター内	福島市役所	22	0.027	PA1000
21	1m	福島市公会堂(駐車場)	22/16/00	0.250	PA1000
22	地上	福島市公会堂除染現場 土壌覆黒ビニール上	22	6.130	PA1000
23	1m	福島市公会堂現場近く	22	0.366	PA1000
24	1m	小学校駐車場	22	0.170	PA1000
25	1m	小学校壁面	22	0.131	PA1000
26	1m	小学校裏歩道	22	0.631	PA1000
27	1m	小学校研修室	22	0.082	PA1000
28	1m	バイナリー	23/9/300	0.086	PA1000
29	車中	本宮市国道303号線	23/15/19	0.114	PA1000
30	1m	那須IC	23/16/54	0.060	PA1000